

# 移動格の「を」について

杉本 武

## 1. はじめに

日本語には、次のような、目的語とは異なる「～を」が存在する。

(1) 選手がトラックを走った。

このような「を」を奥津(1967)は、「移動格」の「を」と呼び、目的語の「を」と区別している。また、同じ移動格の「を」と言っても、(1)のように「経路」を表すもの、次の(2)のように「経由点」を表すもの、(3)のように「起点」を表すものと、様々である。

(2) 先頭集団が中間地点を通過した。 (経由点)

(3) 選手達が国立競技場を出発した。 (起点)

杉本(1986a)では、「他動性(Transitivity)」(cf. Hopper & Thompson (1980), Sugamoto (1982))の観点から移動格の「を」について考察した。そして、これらの「用法<sup>(1)</sup>」が全て、他動性の特徴のうち「影響の全体性」を持ち、移動格の「を」が目的語の「を」<sup>(2)</sup>と近い性質を持つことを指摘した。

しかし、移動格の「を」には、「影響の全体性」という特徴では説明できない側面がある。また、移動格の「を」に「影響の全体性」を認めることに疑問が生じる場合もある。本稿では、「影響の全体性」という特徴を再検討した上で、移動格の「を」には、「移動の方向性の明確さ」という特徴があり、これによって、「影響の全体性」が不要になることを論じたい。

## 2. 移動の全体性

1.でも述べたように、杉本(1986a)では、移動格の「を」の各用法は、「影響の全体性」という点で共通するとした。本章では、まず、この移動格の「を」の全体性について、その問題点を示したい。

全体性について、まず経路の「を」の場合を見てみよう。

(4)a. 校庭を走る。

b. 校庭で走る。

(5)a. 公園を散歩する。

b. 公園で散歩する。

久野(1973)、Sugamoto (1982)で指摘されているように、「～で」も「～を」も移動の場所を表すが、「で」が移動の範囲を限定するだけであるのに対して、「を」を用いると、その場所を全体的に移動するという解釈になる。例えば、(4b)の場合、「校庭」の片隅で

「走っ」ていてもよいが、(4a)では、そうではなく、「校庭」のかなり広い範囲で「走ら」なければならない。(5)に関しても同様なことが言える。このことから、「を」の場合、その領域（「～を」で示される場所を「領域」と呼ぶことにする）を全体的に移動しなければならないが、「で」の場合は、その必要がないということが言える。

このような違いから、次のように、「～で」と「～を」の両方を文に含めることができる（(7)は、「公園」の中に「森」がある場合）。

- (6)a. 学校で校庭を走る。
- b. \*学校を校庭で走る。
- (7)a. 公園で森を散歩する。
- b. \*公園を森で散歩する。

この場合、a.のように、「で」で広い範囲を限定し、「を」でその中でも実際に移動する場所を示すことになる。これとは逆に、b.のように、「を」で広い範囲を限定し、「で」で実際に移動する場所を示すことはできない。

次の経由点の「を」の場合も、その領域の端から端までを移動するので、全体的であると言える。

- (8) 列車が鉄橋を通過した。

また、次のような例の場合、その領域が点的に捉えられているので、これも全体的であると言える<sup>(3)</sup>。

- (9) 選手がチェックポイントを過ぎた。

最後に、起点の「を」の場合が問題であるが、起点の「から」と比較すると、これも全体性という特徴を持つことがわかる。

- (10) 船が港を離れた。
- (11) 船が港から離れた。

杉本(1983)で指摘したように、(11)の場合、「船」は、「離れる」以前において、必ずしも「港」に停泊している必要はないが、(10)の場合、「港」に停泊した後、「港」の外に移動する必要がある。つまり、「を」の場合、その領域内での移動が必要になる。このため、「遠ざかる」の場合、「を」が使えないのは、「遠ざかる」が領域内での移動を含まないためであると考えられる。

- (12) \*船が港を遠ざかった。
- (13) 船が港から遠ざかった。

また、次の「出る」のように、動詞自体がその領域内での移動を含む場合もある。

- (14) 太郎が部屋を出た。

このように、起点の「を」の場合、その領域内での移動が必要とされ、これも全体性の現れであると考えられるが、全体性の程度は経路の「を」よりも低いと思われる。例えば(14)の場合、「部屋」の中での移動があるにしても、局部的であってもかまわない（例え

ば、ドアの所に立っていて、外に出る場合)。この点で、起点の「を」の全体性は、経路の「を」のそれよりも低い。

また、次の例は経由点の「を」の場合であるが、この場合も、「川」を横切るなのであって、「川」全体を移動するわけではなく、全体性は低い。

(15) 太郎が川を渡った。

つまり、移動格の「を」には、その各用法にわたって全体性という特徴が見られるが、その特徴には、次のような程度の違いが認められる。

(16) 経路 > 経由点 > 起点

ところが、これが正しいとすると、不都合も生じる。杉本(1986a)では、この全体性という特徴を目的語の「を」との共通性として挙げた。そうすると、全体性の最も高い経路の「を」は、目的語に最も近い性質を持つことになるはずであるが、これは事実とは異なる。実際に、目的語の「を」と最も近い性質を持つのは、起点の「を」である。また、杉本(1993)で考察した「状況」の「を」は、目的語の「を」と最も遠い性質を持つが、経路の「を」と近い関係を持つ<sup>(4)</sup>。次に、この問題について考えてみよう。

まず、起点の「を」が目的語の「を」に最も近いとする根拠を示したい。起点の「を」には、次のような抽象的用法が存在する。

(17) 息子が大学を出た。 (=卒業した)

(18) 息子が家を出た。 (=自立した)

これは、具体的用法との関わりから、「抽象的」起点と考えられる。しかし、(17)は、次のように言い換えることもできるが、この「を」も移動格の「を」なのであろうか。

(19) 息子が大学を卒業した。

この場合も、杉本(1986a)で指摘した使役化の現象から、移動格の「を」であると言うことができる。

通常の目的語の場合、使役文にした際、元の主語(次の例の「太郎」)に「を」を付けることができない。これは、既に目的語が存在するので、新たに目的語を作り出すことができないためであると考えられる。

(20)a. 太郎が皿を割った。

b. \*次郎が太郎を割らせたのは皿だ。

c. 次郎が太郎に割らせたのは皿だ。

しかし、移動格の「を」の場合、そうはならない。

(21)a. 太郎が川沿いの道を走った。

b. 先生が太郎を走らせたのは川沿いの道だ。

c. 先生が太郎に走らせたのは川沿いの道だ。

これは、この場合の「～を」が目的語ではないため、新たに目的語を作り出すことができると考えられる。

問題の(19)の場合、このテストからは目的語ではないと判断される。

- (22)a. 息子はその大学を卒業した。
- b. 彼が息子を卒業させたのはその大学だ。

杉本(1986a)で指摘したように、このような抽象的起点を表すものの中には、目的語と非目的語の中間的な性格を持つものがある。例えば「やめる」は、「～を」にとるものによって、振る舞いが変わってくる。

- (23)a. 太郎がこの会社をやめた。
- b. 花子が太郎をやめさせたのはこの会社だ。

この場合も、抽象的起点と考えられるが、同じ「やめる」であっても、次のような場合は、「～を」が目的語のように振る舞う。

- (24)a. 太郎が煙草をやめた。
- b. \*花子が太郎をやめさせたのは煙草だ。
- c. 花子が太郎にやめさせたのは煙草だ。

また、「やめる」と似た意味を持つ「あきらめる」の場合も、「～を」は、抽象的起点を表すが、目的語のように振る舞う。

- (25)a. 太郎が進学をあきらめた。
- b. \*父親が太郎をあきらめさせたのは進学だ。
- c. 父親が太郎にあきらめさせたのは進学だ。

「あきらめる」に特徴的なのは、「～を」が「進学する」という「コト」を表すことである。同様に、「やめる」の場合も、目的語のように振る舞う「煙草を」は、「煙草を喫う」という「コト」を表す。したがって、(24a)(25a)は、次のように言い換えることもできる。

- (24)d. 太郎が煙草を喫うのをやめた。
- (25)d. 太郎が進学するのをあきらめた。

このように、抽象的起点であっても、それが「コト」である場合は目的語のように振る舞うのである。

以上の現象からは、起点の「を」の目的語の「を」との近接性が認められる。次に、状況の「を」の問題について見てみよう。杉本(1993:30)では、状況の「を」と経路の「を」の区別をつけがたい例として、次のようなものを挙げた。

- (26) 桜吹雪の中を歩いた。

これは、状況の「を」と経路の「を」の近い性質を示している。しかし、状況の「～を」は、全く副詞的で、目的語とは最も遠いものである。

このように、全体性の点から目的語の「を」に最も近いと考えられる経路の「を」は、副詞的な状況の「を」に近く、全体性の点から目的語の「を」から最も遠いと考えられる起点の「を」が、目的語の「を」に近い性質を持つのである<sup>(5)</sup>。これは、全体性という特徴から移動格の「を」を考えることが、妥当ではないということを示している。

### 3. 移動の方向性

前章で見たように、「全体性」を移動格の「を」の「重要な」特徴とみなすことには、疑問がある。それでは、どのような特徴を考えればよいのであろうか。まず、次の文を見てみたい。

(27) ?太郎は池を泳いだ。

(28) 太郎はプールを泳いだ。

このように、「泳ぐ」の場合、「プール」に比べ、「池」は若干不自然である。ここで、次のような違いが考えられる。「泳ぐ」という動作において、その移動場所が「プール」である場合、その移動の方向性が考えやすい（「プール」にはコースがある）が、「池」の場合、考えにくい。このことから、移動格の「を」に、移動に一定の方向性があるという特徴を仮定してみよう。このように仮定すると、次のような文の場合、「部屋」に方向性が認めにくいので、不自然になると考えることができる<sup>(6)</sup>。

(29) ?太郎は部屋を歩いた。

また、先の(27)の例であっても、次のようにすると、方向性を認めやすくなり、自然な文になる。

(30) 太郎は端から端まで池を泳いだ。

この「方向性」は、起点の「を」の場合、非常に明確なものになる。

(31) 太郎は建物を出た。

この場合、「建物」の中から外へという方向性が、動作の様態によって必然的に決定される。

次に、経由点の「を」の場合を考えたいが、その前に、この経由点の「を」の性格について少し考えてみたい。まず、次の例を見てみよう。

(32) バスはそのバス停を通り過ぎた。

このように、その領域が点的なものであれば、経由点と捉えやすいが、次のように、経由点に広がりがある場合、経路ともとれるようになる。

(33) 太郎は橋を渡った。

したがって、これを「ている」形にすると、進行相を表すことになる。

(34) 太郎は橋を渡っている。

これに対して、次のように、その領域の外側を明示的に示すと、経由点ととりやすくなる。

(35) 太郎は、橋を渡って、向こう岸に行った。

また、次のように、起点とも経由点ともとれる場合もある<sup>(7)</sup>。

(36)a. 列車はトンネルを抜けた。

b. 列車はトンネルから抜けた。

このように、経由点は、経路と起点の中間的な性質を持つものである。したがって、方

向性の観点から見ると、(33)の場合、経路に準じた性質を持つが、(36a)の場合、起点に準じた性質を持つ。

次に、この方向性との関係で、状況の「を」について考えてみたい。杉本(1986a)、杉本(1993)で述べたように、状況の「を」は、移動動詞でなくとも、何らかの移動を伴うような動作を表す動詞と共起することができる。

(37) 暗闇の中をスイッチを探した。

(38) 豪雨の中を敵と戦った。

「探す」「戦う」のような動作は、移動を伴うが、明確な方向性は持たない。この意味で、状況は、経路よりも方向性が明確でないと言うことができる。

この方向性によって、鈴木(1978)の指摘している現象も説明することができる。鈴木(1978)は、次のような例について、「「を」はしっくりしない」とし、「これは「海」とか「山」とかいったものは広大無辺のもので、その境界がはつきりしないからである (p.67)」と述べている。

(39) ?海を出る。

(40) ?山を出る。

これは、広い領域の場合、起点の「を」であっても、一義的に方向性が定まらないため、不適格になると考えられる。

以上のように、方向性の明確さという点からは、移動格の「を」に次のような違いを認めることができる。

(41) 起点 > 経由点 > 経路 > 状況

次に問題になるのは、移動の方向性が明確であると、なぜ目的語に近くなるのかである。

これには、「意志性」が関わっていると考えられる<sup>(8)</sup>。方向性が明確であるためには、移動の意志性が高くなくてはならない。益岡・田窪(1987)が指摘しているように、「自分の意志で行う動作でないとき (p.41)」には、「を」が使えない(次の例は、益岡・田窪(1987:41)による)。

(42)a. \*馬を落ちる。

b. 馬から落ちる。

(43)a. \*煙が煙突を出る。

b. 煙が煙突から出る。

「意志性」も他動性の一つの要因であり (cf. Hopper & Thompson (1980))、このため、他動性が高まり、目的語に近くなると考えられる。

もちろん、このような移動動詞の主語は、人間であるとは限らない。例えば、次のような乗り物の場合は、「を」を用いることができるが、これは、人間の操縦するものであるからである。

(44) 船が港を出た。

したがって、次のような人間のコントロールを離れてしまったものには、「を」は用いられない<sup>(9)</sup>。

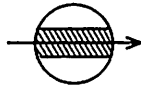
- (45)a. \*(投げた)ボールがレーンを出てしまった。
- b. (投げた)ボールがレーンから出てしまった。

#### 4. 全体性と方向性

前章では、移動格の「を」の重要な特徴として、移動の方向性の明確さというものを提示した。これと、従来言われている影響の全体性はどのように関わるのであろうか。一つの考え方は、全体性は方向性に還元できるとするものであろう。

杉本(1984)、杉本(1986a)では、もともと、次のような例に関して、「擬似的な方向性(杉本(1986a:60))」を想定し、その方向性によって生じる経路((47)の斜線部)が全体的に影響を受けるとしており、方向性という特徴に依存している。

- (46) 校庭を通った。
- (47) 円 = 領域



また、杉本(1986a:316)では、次のような例は、領域内での移動がないため、その扱いを保留していた。

- (48) 人工衛星が地球を回っている。

この場合、全体性は認められないが、移動の方向性は明確である。ただし、この場合、「地球」に「地球のまわりの軌道」ということが含意されていると考えることもできるので、全体性を認められるかもしれない<sup>(10)</sup>。

これに対して、2.で述べたように、経路の「を」と場所の「で」の対比の上からは、全体性という特徴が必要になるように見える。

- (49)a. 道を歩いた。
- b. 道で歩いた。

しかし、これも、全体性という特徴なしでも、「を」は「移動が行われる場所」を示し、「で」は「動作が行われる場所」を示す(つまり、「を」の方が「移動」との結び付きが強い)とすることで、その違いを説明することができるであろう。もともと、「を」と「で」を比べると、「を」の方が、移動する範囲が広いという程度で、事実上、全体を移動するわけではない。したがって、次のような表現も可能である。

- (50) 道を少し歩いた。

なお、起点の「を」の場合、「から」と異なり領域内での移動が必要になるという点も、「移動が行われる場所」ということから説明できる。

さらに、仮に全体的であったとしても、その領域に何らかの影響を及ぼすわけではない。

この点で、「影響の全体性」ということをそのまま移動格の「を」に当てはめてしまうことは、(目的語の「を」にはその特徴が認められるにしても) 疑わしい。

このような点から、移動格の「を」には、「移動の方向性の明確さ」という特徴があれば、「影響の全体性」という特徴は必要ではないと考えられる。

## 5. おわりに

本稿では、移動格の「を」の特徴として、「影響の全体性」というものに代えて、「移動の方向性の明確さ」というものを提案した。しかし、移動格の「を」を特徴づけるものは、これだけではないであろう。

移動格の「を」に関する不可解な現象として、経路の「を」、経由点の「を」、起点の「を」があるのに、なぜ「着点」の「を」がないのか、ということがある。例えば次の文は不自然である<sup>(11)</sup>。

(51)??部屋に入った。

移動格の「を」が「移動の行われる場所」を示すのであれば、着点の「を」があってもよさそうである。この現象は、方向性からは説明することができない。

このような現象も含め、さらに検討が必要であろう。今後の課題としたい。

## 注

- (1) 本稿では、「経路」「経由点」「起点」の「を」の違いは、格助詞の違い(つまり同音異義語)ではなく、動詞の意味に依存した、同一の格助詞における用法と考える。
- (2) 杉本(1986a)の用語では「対格」の「を」であるが、本稿では「目的語」の「を」と呼ぶことにする。
- (3) ただし、このように点的な領域の場合、果たして全体性ということ言うことが妥当であるのか、疑問は残る。
- (4) 杉本(1993)は、状況の「を」も、移動格の「を」の一種であると考えている。
- (5) 数量詞の移動の現象からも、経路の「を」よりも起点の「を」の方が目的語の「を」に近いということが示される。

i)a. 学生が 3人論文を書いた。

b. \*学生が論文を 3人書いた。

このように、主語を修飾する数量詞を目的語の後ろに移動することはできない (cf. Miyagawa (1989)). 起点の「を」の場合も、同様な現象が認められる (ii)~iv) のような現象は、宮川繁氏の指摘による)。

ii)a. 学生が 3人部屋を出た。

b. \*学生が部屋を 3人出た。

ちなみに、「から」の場合は数量詞の移動を許す。



iii)a. 学生が3人部屋から出た。

b. 学生が部屋から3人出た。

ところが、経路の「を」の場合、不自然ではあるが、数量詞の移動を許すようである。

iv)a. 選手が3人コースを走った。

b. ?選手がコースを3人走った。

また、次のように、状況の「を」の場合は、経路の「を」よりもよくなるようである。

v)a. 子供が3人雨の中を遊んでいる。

b. 子供が雨の中を3人遊んでいる。

ただし、例文の判定が微妙であるので、この現象は傍証にとどめたい。

(6) ただし、次のように、「～まわる」とするとよくなる。

i) 太郎は部屋を歩きまわった。

これは問題として残る。

(7) 「抜ける」は、成田(1979)では、「経路格」をとる動詞として分類されている。

(8) 森田(1980)は、「「を」によって示される場面はその移動動作・行為の対象となる場面であり、その移動は目的意識をもつ (p.539)」と述べている。

(9) ただし、次の例は反例のようにも見える。

i) ボールが道をころがっている。

ここで、(45)の「を」が起点の「を」であるのに対し、この「を」が経路の「を」であるという違いとともに、「ころがる」が本来無生物主語をとるという違いもある。これをどのように扱うかは問題として残る。

(10) 例えば、そのような含意をしにくい場合は、不自然になる。

i)a. ??棒を回った。

b. 棒のまわりを回った。

(11) なお、次のa.のような文はよさそうであるが、b.のように、別に着点をとることができることから、経由点の「を」と考えられる。

i)a. 門を入った。

b. 門を中に入った。

#### 参考文献

Hopper, Paul J. & Sandra A. Thompson (1980), "Transitivity in Grammar and Discourse," Language 56:2, pp.251-299.

Miyagawa, Shigeru (1989), Syntax and Semantics 22, Structure and Case Marking in Japanese, Academic Press.

Sugamoto, Nobuko (1982), "Transitivity and Objecthood in Japanese," in Paul J.

Hopper & Sandra A. Thompson (eds.) Syntax and Semantics 15, Studies in Transitivity, pp.423-447, Academic Press.

奥津敬一郎(1967)「自動化・他動化および両極化転形——自・他動詞の対応——」、『国語学』70、pp.46-66

久野暉(1973)『日本文法研究』、大修館書店

杉本武(1979)「まわる・めぐる」、『日本語研究』2、pp.18-21、東京都立大学日本語研究会

——(1981)「さける・よける」、『日本語研究』4、pp.45-50、東京都立大学日本語研究会

——(1983)「はなれる・はずれる・とおざかる」、『日本語研究』6、pp.17-26、東京都立大学日本語研究会

——(1984)「とおる・すぎる・ぬける——移動領域との関わりを中心に——」、『日本語研究』7、pp.3-11、東京都立大学日本語研究会

——(1986a)「格助詞——「が」「を」「に」と文法関係——」、奥津敬一郎・沼田善子・杉本武『いわゆる日本語助詞の研究』、pp.227-380、凡人社

——(1986b)「やめる・よす・おえる」、『日本語研究』8、pp.32-39、東京都立大学日本語研究会

——(1993)「状況の「を」について」、『九州工業大学情報工学部紀要(人文・社会科学篇)』6、pp.25-37、九州工業大学

鈴木忍(1978)『教師用日本語教育ハンドブック(3) 文法I 助詞の諸問題 1』、国際交流基金

成田徹男(1979)「動詞の意味と格——「移動」に関する動詞を中心に——」、『人文学報』132、pp.47-64、東京都立大学

益岡隆志・田窪行則(1987)『日本語文法セルフ・マスターシリーズ 3 格助詞』、くろしお出版

森田良行(1980)『基礎日本語 2』、角川書店

(すぎもと たけし・九州工業大学助教授)